

保育をつなぐ

～ お茶の水女子大学附属幼稚園からの発信 ～

Vol.12

海外とのつながり



上坂元絵里



シリーズ「保育をつなぐ」は3年間の連載で12回を数えます。これまで、附属幼稚園からは学級担任、フリー教諭、養護教諭、事務職員と多様な立場の教職員が、お茶の水女子大学学内から学内保育施設いずみナーサリーの保育士、大学の子ども学コース教員が、さらに旧職員代表として元附属幼稚園副園長が、附属幼稚園の教育・保育をめぐる、それぞれの立場からのつながりについて綴ってきました。

本シリーズは今号で一区切りとなります。最終回は附属幼稚園に国内外から訪れる参観、研修の訪問者との交流について、2年前に戻って、印象深かったつながりを振り返っていきます。

長期にわたる新型コロナウイルス感染症の影響で人とのつながりが大きく制約されている今だからこそ、子どもたち、さらには教職員、保護者、研究者にとって国を超えて幼児期の教育がつながることの意味を再確認できればと思います。

*

上坂元絵里（かみさかもと えり）
愛育幼稚園（東京都港区）園長。
前お茶の水女子大学附属幼稚園副園長。

およそ2年前、当初は遠い出来事と思われた新型コロナウイルス感染症が、瞬く間に日本でも猛威を振るうようになりました。保育所や幼稚園、小学校等が感染拡大防止対応に追われ、それまで当たり前につながっていたさまざまなネットワークが断たれる予想だにできなかった生活が始まり、続いています。

令和元年度までは附属幼稚園には国内外から多くの参観、研修の依頼が寄せられていました。令和元年度実績は、国内は公開保育と合わせて約350名、国外は十数か国、100名を超えます。こうした各地からの訪問者を受け入れ案内し、園舎園庭の環境、子どもたちの様子、本園の教育について説明するのは主に副園長の役割で、多くの出会いの中に、印象に残る場面がいくつもありました。

海外からの来訪者

欧州から訪れたA女史は、正面玄関から園

舎に入り、中央廊下をほんの数歩進んだだけで、「ここにいる子どもたちが満たされて過ごしていることがわかります」と話され、私は「まだ到着してほんのわずかしかったくないのに」と、とても驚かされました。別の日、やはり欧州から来訪のB氏は、園舎から園庭を一回り巡ったところで「私もこの幼稚園の園児として過ごしてみたかった」とつぶやかれました。附属幼稚園の毎日の生活は、短時間見ただけでは伝わりにくいのだとは思っていたのですが、子どもたちがじつくり、一生懸命と体を動かして遊ぶ姿から確実に伝わっていくものがあると確認できました。

海外からの来訪は、子どもたちにとって強く興味を惹かれる出来事で、毎年、自主的に案内役を買って出てくれる子が現れます。近年、幼児期から英語を学ぶ子どもも増えて、「ハロー、マイネームイズ○○」と自分から話しかける、中には来訪者からの簡単な問

いかけに英語で答える子もいます。小学校への英語教育導入で加速している英語の早期教育に賛同するわけではありませんが、実際に外国語でコミュニケーションをとる体験は、子どもたちのグローバルな視野を育てるきっかけになるのかもしれませんが。

A子の「ジョージア」メモ

JICA^{*}からの参観依頼で、ジョージアからの訪問を受けたことがありました。JICA職員である保護者に送迎時に「ジョージアからの訪問があるんですよ」と伝えたのを聞いていたのか、A子はある時、私に「ジョージアってどんな国なの？」と尋ねてきました。ジョージアの国旗は思い浮かぶけれど、とっさに答えられる知識は持ちあわせず、「私もあんまり知らないの。A子ちゃん、何かわかったら私にも教えてね」と答えました。数日後、登園時に門に立って朝の挨拶をする私に、A

子が小さなメモを手渡してくれました。少したどたどしい鉛筆書きで、ジョージアの人口や特色が書かれていました。「ジョージアは、スポーツにたいへんちからをいれていて、ほんのすもうによく似たチダオバというものがある」といった内容でした。東京2020オリンピックの柔道で、ジョージアの国名を耳にするにつけ、A子のメモの内容が思い出され、活躍の背景が理解されて、一人納得する思いでした。A子が過ごす自分の幼稚園に海外からの訪問者が多かったこと、自分の親が海外とつながる仕事をしていたこと、こうしたつながりがA子の中で、これからさらにどうつながっていくのか楽しみな気がします。

中西部アフリカとの連携プログラム

もう一つ、お茶の水女子大学が10年以上継続しているJICAとの連携プログラムで、中西部アフリカの教育関係者が毎年、幼稚園

* 国際協力機構

を訪問、研修する日がありました。附属幼稚園への訪問は運動会前後の時期にあたることが多く、年長児が事前に訪問国の旗を描いて歓迎し、運動会の踊りを披露したり、保育室での交流タイムにアフリカ各国の先生方に質問をしたりします。中には民族衣装を着ている方もいて、園にある楽器で即興で楽曲を披露したり踊りを見せてくれたりすることもありました。リズムカルな動きや子どもたちへの親しみをもったかわり方は、私たちも学ぶところが多く、教育的に意味深い時間です。

玄関に地図を掲示

写真は、令和元年度に作成を試みた訪問者世界各地からの来訪者が続いたので、玄関ホール



した世界地図を張り出し、そこに来園された国の旗を持ったマスコットを貼り付けることにしました。

実はこのアイデアはボランティアの保護者から出されたものでした。保護者ボランティアに絵本の修理を依頼した際に、

印刷した世界地図を貼り合わせる作業もお願いしました。作業をしながら保護者の一人が、「訪問者の人の絵を地図に貼り付けたらいいのでは」とつぶやかれたのがヒントになり、絵を描くのが得意な教員に民族衣装を着たマスコットを描いてもらうことにしました。世界地図を掲示した壁面近くにはソファが置いてあり、子どもたちがそこに座って、地図を



見ながら「日本はどこ?」「私が生まれたのはマレーシアだった」「お父さんはアメリカに行ったことがあるよ」「私はここに行くんだ(パツと指をさして)」などと会話している光景を時折見かけました。私たちが子どもだった頃と比べ、世界がぐっと身近になっていることが伝わってきました。

通訳になりたいという夢

私は小学校の頃、通訳になりたいと思っていたことがありました。ちょうどアポロの月面着陸といった世界的なニュースが報じられ、同時通訳という仕事を目にしたことがきっかけになった記憶があります。幼稚園教諭として働きつつ、もう一つ夢がかなったわけです。会話力は初心者レベルですが、幼児期に大切にしたいことを、実際に子どもたちの姿を目の前にしながら伝えようとすると、乏しい英語力でも伝わっていくものがあります。ある

時、B児の母親が「Bが『副園長先生みたい』に英語が話せるようになりたい」と言っていました」と声をかけてくださったことがあり、B児がそんなふうに見ていたことに驚かされ、実際は大した英語力でなくても、一人の子どもが「英語で話せるようになりたい」と思うきっかけのひとつになったならうれしいことだと思っただけです。

前述の中西部アフリカからの研修生の方々、それぞれの国に戻れば多大な影響力をもつ立場にあり、盛りだくさんな研修プログラムにエネルギーを向ける姿勢に圧倒されるものがありました。子どもたちが遊ぶ様子を紹介しながら「子どもたちの輝く目、動く心を大切に」と一生懸命伝えようと、その先生もキラキラとした目でうなずいてくれたことが忘れられません。母国語、外国語に関係なく、伝えたい思いをもって話すことの大切さをあらためて感じた瞬間でした。

幼児期の教育で大切にしたいこと

アジアの国々からの訪問者を受け入れる中で、幼児期からの早期教育重視から、幼児期の遊びを大切にする教育へと移行しようとする方針転換を感じる機会が多くありました。今こそ子どもを中心に置き、子どもが自分で考え、判断し、選択する力を育てる幼児期の教育の意義を伝えていくときだと感じました。

附属幼稚園が大切に行っている、子どもの主体性を育み、遊びを中心とした幼児期の教育は、短時間の訪問で見ただけでは、参観後に少し説明を加えたとしても伝わりにくいのではないかと考えていました。しかしながら、子どもたちがのびのびと、力いっぱい生活する姿から、幼児期の教育で大切にしたいことは伝わり、そして対話を通して私たちもあらためて学ぶことがたくさんありました。

まとめにかえて

私は、長年お茶の水女子大学附属幼稚園の教員として勤務し、現在は私立幼稚園の園長として、保育の現場で、今までと同じ、近い、少し違う、こんな考え方もあると新たに感じながら日々を過ごしています。今の勤務園が立地する場所の特色として、ダブルルーツをもつ在園児も多く、通園時に保護者同士が英語で会話する姿も珍しくありません。子どもたちが多様なひと、もの、こととつながり育つことを支え、後押ししていかれたらと願っています。

人の往来が回復し、附属幼稚園の子どもたちの姿を共に見て、感じ、学びあい、子どもも大人も育ちあう日々が戻ることを切に願い、附属幼稚園がこれからも多様なつながりの中で新たな発信を重ねていられることを応援しています。



—おわり—